
ろくでなしの救世主

ダルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ろくでなしの救世主

【NZコード】

N6799Y

【作者名】

ダルマ

【あらすじ】

王立魔法学院に入学した少年の話。

今日の王都はいつも以上に賑やかになつていて。街は装飾に彩られ、窓から放たれる鮮やかな紙吹雪が空を舞い、露店が軒を連ね、多くの人が往来している。

王立オデュッセル魔法学院の入学式は街を上げてのパレードによつてまるでお祭りのような騒ぎになつていて。それもそのはず、魔法学院とはその名の通り魔法士を育てる教育機関で、王国の中でも魔法学院と呼ばれるものは、王都にあるオデュッセル、西都にあるアリス、東都にあるグリーダナの三つしかない。

魔法士とは魔法を使う者の名であり、その力は絶大で、王国の軍事力をはじめ、様々な分野の中核を担つていて。それだけに、魔法士育成は国策として教育に組み込まれており、その魔法学院の新入生はいわば金の卵達であり、国民からは尊敬と期待の目で見られる。

そんな中を、学院の制服に身を包んだ一組の男女が歩いていた。胸に着けたエンブレムの紋様から、新入生だということが分かる。きらびやかな光景に目を奪われながら、亞麻色の髪をした少年が言った。

「すごいな。まるでお祭りだ」

少年の目には、大道芸人や楽隊、仮装集団など様々なものが映る。そのどれもが新鮮で刺激的だった。

するとその隣を歩く栗色の髪をした少女が言つ。

「ウイル、あんまりウロウロしてたら迷子になるよ」

ウイルと言われた少年はそれに溜息を溢す。

「子供扱いするなよ、カイネ」

「何言つてるの、ウイルはまだ子供でしょ」

カイネと呼ばれた少女はそう言つてウイルを見る。肩を並べるとより分かるが、カイネの方がウイルよりも背が高い。これはウイルの背が普通より低いのが原因だつたが、カイネの大人びた顔立ちも相まって、並んで歩くとまるで姉弟のよつだつた。

二人は同じ孤児院で育つた、幼馴染だつた。年は変わらないが、いじめられつ子だつたウイルをカイネが助けたことがきっかけで仲良くなり、現在では本当の姉弟のような関係になつていた。

「ほら、ネクタイ曲がつてゐる」

カイネはそう言つてウイルのネクタイに手を伸ばす。それをウイルは身体を反らして避けようとする。

「や、やめろよつ、恥ずかしい…」

「入学式でネクタイ曲げてる方がよつほど恥ずかしいでしょ。ほら、じつとして」

幼馴染としての経験により、抵抗は無駄だと悟つたウイルは、まるで人形のように身を固まらせ、カイネにされるがままの状態になる。往来の人々の視線を感じ赤面すると同時に、いつもと違う制服姿の

幼馴染が田の前に迫り、ウイルは少しだけ緊張していた。

「よし、これでオッケー！」

カイネの声を聞いてやつとウイルの肩の力が抜けた。

視線を胸元に落とすと、ネクタイはしつかりと整えられていた。

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして！ ねえ、入学式までもまだ時間があるし、ちょっと観光しない？」

ウイルが時計台を見上げると、確かに入学式の集合時間までも十分な時間が余っている。わざわざ早めに学院に行つて楽しみを無碍にするのも何である。いや、むしろ新入生がある程度観光を楽しめるように時間が設けられていたと考えるのが自然だろう。実際ウイル自身もこの祭りの雰囲気にのまれてうずうずしていた。

「そうだね、せっかくだし楽しもうか！」

ウイルの言葉にカイネは頷く。

そして笑顔の二人は、騒がしい人々の流れの中に混じつていった。

街のいたる所で人だかりが出来ており、一方では王国の国父、英雄王の叙事詩を綺麗な声と動きで伝える吟遊詩人や、一方では口から火を噴き剣を飲み込む大道芸人など、様々なものが人々の興味を引いていた。

そして両脇に露店が軒を連ねる街で最も広い一本道では、ホットドッグやリング飴などの軽食を売る屋台、景品の懸けられた遊戯を提供する店など、様々なものがあつた。

その中の一つ、甘くいい匂いのする露店に一人は立ち寄った。露店には黄金色に焼けたパンが並べられ、それを見た一人は声を上げる。

「わあ～！ おいしそう～！」

「確かにうますうだ……」

二人が腹の虫を鳴らしていると、店主のお姉さんが言つた。

「あなた達、その格好は新入生ね？」

「え？ は、はい」

「それじゃこれはサービスよ！ 入学式の前に小腹を満たしひきなさい～！」

そう言つてパン屋のお姉さんは店のパンを袋に入れて渡した。それに驚いたカイネは言つた。

「え、いいんですか？」

「もちろん、新入生にはみんなタダよ」

お姉さんは笑いながらサラリと言つた。
そんな彼女にウイルは言つた。

「なんだか悪いなあ……」

「ああ、気にしないで。ウチだけじゃなくて露店やってる人らは大体みんな新入生にはサービスしてるから。みんなあなた達に期待してるのよ。まあ、聞こえは悪いけど投資つてやつ？ 将来、有名になつた魔法士が自分のお店に通つてたとなつたらそのお店は大繁盛でしょ。だからみんな自分がやつてるお店の名前を覚えて貰おうと必死なの」

なるほど、とウイルは納得する。
するとカイネが気付いたように言つた。

「ところは、お姉さんもお店をやつてるの？」

「うん。『サンタニーノ』ってカフHやつてるから、よかつたら覚えとこでね」

お姉さんはニツコリと笑う。

それを見てカイネとウイルの二人は言つた。

「ぜ、絶対行きます！」

「お、俺も！」

「ふふ、期待しないで待ってるわ」

彼女は優しい目で一人を見ながらさう言つた。カイネとウィルはお礼を言つて露店を離れた。

再び人々の混雑する中に戻つた二人。

歩きながら、ウィルは貰つたパンを袋から出ししゃべつやべ一口食べた。

「！ う、うまい！」

あまりのおいしさに思わず声を上げるウィル。それを聞いた隣のカイネがウィルを見る。

「おおげさよウィル」

「いいからカイネも食べてみるよ！ す、すまないから！」

言われて、カイネもパンを一口、口に運ぶ。するとカイネも、思わず口元を綻ばせる。

「ほんとだ、おいしい」

「だろ？」

「表面はパリッとしてるのに生地はもちもちしてて、それに甘さ控えめのカスタードクリームが絶妙にマッチしてる……シンプルで無駄のないおいしさって感じ」

カイネの言葉にウイルは大きく頷く。

それは一人が今まで食べたパンの常識が軽く覆るほど、衝撃的な味覚体験だった。

「確かサンタニコって言つたよな。しまつた、場所聞くの忘れてた」

悔しそうにパンをもう一口、口に運ぶウイル。すると、カイネがパンの袋の中に一枚の紙が入っているのに気付いた。

「なにこれ……？」

紙を取り出し、カイネとウイルはそこに書かれたことに目を落とす。

そこにはカフエ・サンタニコの住所が手書きの地図とかわいらしいイラスト付きで記されていた。恐らく、パンを渡す時にあのお姉さんが袋の中に忍ばしておいたのだろう。

二人は顔を見合わせ、思わず笑つた。

「商売上手ね」

「うん。これじゃ行かない訳にはいかないよ」

後で必ずサンタニコに行こうと一人が決めたその時だつた。
道の先から何やら騒がしい声が聞こえる。

何事かと一人が前方に目をやると、上空に一つの陰が見えた。

「なんだ？」

ウィルは最初、鳶か何かと思ったが、それにしてもあまりに大きい。
それは何か紙のようなものをばら撒きながら、建物の上空をスレス
レで飛行していた。

「またあいつらだ！」

同じく空を見上げていた人々の中からそんな声が上がつた。
それは翼で風を受けながら滑空すると、ウィル達の真上までやって
きた。

それは竜だった。

蜥蜴を連想させる頭部と蝙蝠のような翼をいっぱいに広げ、空を駆
ける。

しかし、その体躯は竜にしては小さく、全長はおよそ2メートル程しかな
い。

そしてウイルが驚いたのは、その竜の上に人が乗っていたことだ。ゴーグルを装着し手綱を引くその青年は、ビラを上空からばら撒きながら叫んだ。

「飛行クラブをよろしくお願ひしまーす！」

そう言って竜と青年はウイル達の頭上を通り過ぎ、あつといつ間に向こうへ飛んで行き、小さい陰となってしまった。

突然の出来事に人々が騒然となる中、ウイルは空からビラヒラと落ちてきたビラを拾い上げると、カイネと一緒にそこに書かれたものに目を落とした。

「なんだこりゃ？」

「飛行クラブ……？」

そこには人間が竜に乗っているイラストと共に「テカデカ」という書かれていた。

『新入生大歓迎！

君も飛行クラブに入ってワイバーンと一緒に空を駆けよう！』

二人は顔を見合せた。

先程の竜はワイバーインだったのだ。ワイバーインとは竜の一種で、ドラゴンの下位存在にあたる。ドラゴンよりも一回り小さく、ドラゴンと違い魔法を使うこともできない。とはいって、ワイバーインに乗つて空を自由に駆け回る姿はまるで竜騎士のようにかっこよかった。

「またたく、今年もやってくれる」

突然後ろから聞こえた声に驚き、一人は振り返る。そこには憲兵の制服に身を包んだ男が立っていた。

「今年も?」

ウイルが訊ねると、憲兵は言った。

「ああ。あいつら『飛行クラブ』は毎年ああやつて派手なパフォーマンスで新入生を勧誘してんのだ」

「飛行クラブって?」

カイネが横から訊ねると、憲兵は続ける。

「飛行クラブってのは魔法学院の数あるクラブの一つで、ワイバーインに乗つて飛行するスポーツ『エアライド』を中心に活動するクラブのことだ。毎年一回、全国大会がある結構有名なスポーツなんだが……やれやれ、今年はビラ撒きか」

「つてことは、去年も何かを？」

「ああ。去年は口ケット花火を作つて空中で派手に打ち上げてたんだが、火薬の量が多すぎて危うく火事になるところだった。だから今年は俺達憲兵も数を増やして警戒してたんだが……まあ、ビラ撒き程度で済んでよかった」

「そんな危険なクラブ、学院はなぜ許してるんですか？」

「それが、飛行クラブの部長は三年生の首席で、1万人に一人の天才と呼ばれていてな、祭りごとの度にああやつてゲリラ的に騒動を起こしてるんだが、怪我人はゼロ、後片付けも自分たちで全部やり、始末書も部長が予め用意している。しかも部長の出す論文は魔法協会も唸らせる程で、学業もしっかりこなしてるから学院も退学させるわけにいかないんだ」

「す、すごい……」

ウイルは驚嘆する。

魔法協会は魔法士を統括し支援する権威ある機関で、魔都ゼポイムを総本山に構えている。魔法士は尊敬される一方で、その力に畏怖する者や嫉妬する者も少なくない。協会はそのようなものを含む世俗一般から魔法士を守る役割も担つていた。

その魔法協会に学生ながら認められるとは、一体どんな人なのだろうか。

ウイルは興味を抱かずにはいられなかった。

そんなウイルを見て、憲兵は言つ。

「ま、付き合ひ先輩は考えて選ぶんだな」

「はい。ありがとうございます、憲兵さん」

カイネがお礼を言つと、憲兵は照れ臭そうに笑つた。

「俺も昔、魔法学院の入試を受けたんだぜ。結果は不合格だつたがな。正直、君らが羨ましいよ。しつかり学んで、たくさん友達を作りといい」

「はい！」

カイネとウイルは声を合わせて言つと、憲兵に別れを告げた。憲兵は敬礼をして二人を見送つた。

それから様々な屋台や見世物を楽しんだ後、時計台を見上げたカイネが入学式の時間が近づいていることに気付いた。思った以上に時間が早く過ぎていたことに驚き、一人は慌てて学院に向かった。

オデュッセル魔法学院は王都の南方にある小高い丘の上に建設されていた。丘から伸びる広く傾斜の緩やかな階段を上り門を潜ると、厚みのある石造りの壁と石柱で出来た学院正面玄関が見えた。

期待と不安に胸を躍らせた新入生達がぞろぞろとそこに吸い込まれていく様をウィルは横目に流しながら言った。

「す、」「いな」

「うん。みんな貴族や豪族の御曹司ばかり。なんだか私達……場違いみたい」

ウィルとカイネは孤児院育ちの平民である。幸い、魔法学院は身分にとらわれず、才能のある者はたとえ平民であろうと入学させ、貴族の子ども達と一緒に授業を受けさせている。とは言つたものの、平民の数が貴族と比べ圧倒的に少ないのも事実で、その底流には根深い貴族達の利権をめぐる思惑が働いていた。

目の前を通り過ぎる身分の違う同じ年の少年少女に若干気圧され、ウィルは弱々しく呟く。

「友達できるかな……」

「ふ、一人で協力すれば友達くらい簡単よ！」

「だといいんだけど……」

二人は一抹の不安を胸に、足を進ませた。

学院は幾つかの施設に分かれており、下級生用教室のある東棟や上級生用教室のある西棟、学生の居住する学生寮、庭園や学院外にある大広庭など様々である。

その中の、玄関ホールを抜け進んだ先にある大広間で入学式は行われる。

大広間は全校生徒を収容するのに十分なスペースを有しており、天井は高くまるで大聖堂のような豪華な装飾によつて優美に彩られていた。

一番前には新入生が椅子に座つた状態で横に並び、少し間を開けた後ろに在校生が並んでいる。そしてその横では、貴族院の重鎮や魔法協会の幹部などの関係者が連なるスペースが設けられていた。

「うわあ……き、緊張してきた

整然と並ぶ王国の権力者達を見て、ウイルは震えあがる。それにウイルの右隣に座るカイネが頷いて言った。

「こんな色々な方面の大物が顔を揃えるなんて……」

ただでさえ周りが貴族のお坊ちゃまだらけなのに加え、当たり前のように並ぶ各方面に名を轟かせるそうそつたる顔ぶれに、二人は居心地悪く、借りてきた猫のように縮まつっていた。

すると、そんな二人の緊張を吹き飛ばすような爽快な笑い声が聞こ

えた。

「はつはつは。 そう緊張するな、兄弟！」

驚いて一人は声のした方を見る。

声の主は、ウイルの左隣りに座る男だった。

堂々と腕を組み、シンシンとした赤髪が特徴的な男だ。

物腰の柔らかな不思議な男だが、ちゃんと学院の制服を着ていることから学生なのは確かだった。エンブレムの紋様も、新入生とそれと同じものだ。

「兄弟？」

ウイルが疑問の声を上げると、男はニカッと笑って白い歯をのぞかせる。

「これから同じ釜の飯を食うんだぜ？」

つまり、俺達は魂と魂でつながったブラザーってわけだ！」

「はあ……」

男の異様なテンションに圧倒され、気の抜けた返事をするウイル。しかし、そんなことは構わずに男は続ける。

「しかし入学早々にカップルとは、羨ましいゼコノヤロー！」

男はそう言ってウイルを肘で小突く。

それに真っ先に反論したのはカイネだった。

「私たちは幼馴染です！」

「ありや、そうなの。ずいぶん仲がいいからてつきり恋人かと。悪い悪い」

そう言って男は平に謝る。

堅苦しい貴族の者ばかりだと思っていたウイルは、気さくな者もいるということが分かつて少し安心していた。

すると男は紅に染まつた髪を搔きながら言つた。

「まあ、とにかく、そんな身構えなくとも大丈夫だつてことだ。あの席の大人達はみんなカボチャだと思えばいい。それよりも大事なのは、新入生の方だ」

「新入生？」

「おう。今年の新入生は注目のルーキーがウヨウヨいやがる。俺の情報によると、目玉はラムザス、メリル、ネロの三人だ」

「よ、よく知つてるな」

「情報は魔法よりも強し、だぜウイル」

突然自分の名を呼ばれたことにウイルは驚く。

「ど、どひして俺の名を…？」

「俺は新入生の個人情報は全て揃えてある。

名前、生年月日、家族関係、身長、体重、etc……入手経路は企業秘密だけどな

無邪気な笑みを浮かべながら言つ赤髪の男に、一人は驚嘆した。

「だが、お前ら一人の情報は名前と孤児院出身ということ以外はほとんど分からなかつた。だからこうして実際に話せてうれしいぜ、

ウイル、カイネ」

一人は困惑しながら愛想笑いを浮かべる。

悪い人ではなさそつだが、あまりうれしくはなかつたからだ。

そして男はコホンと一つ咳払いすると、饒舌に語り始めた。

「話を戻そう。今年の大物ルーキー三人だ。

まずはラムザス。こいつはクレイシス家の御曹司だな。クレイシス家の当主といえば貴族院の中でも特に有力な議員の一人に数えられる男だ。世襲制である以上、その跡はラムザスが引き継ぐことになるだろう。今の内にコネを作つておくのもいいかもしれないぜ。

次はメリル。彼女はなんとオーデュッセル魔法学院の院長の一人娘だ！当然、魔法の腕も相当なものと考えられる。噂では学院長以上の魔法の才能の持ち主だとか。その上、容姿も美しいときてる。まさに才色兼備つてわけだ。

そして最後がネロ。コイツはすげえぞ。何て言つたつてあの『エーレメンツ』の息子なんだからな！

「エーレメンツ！？」

一人の驚きの声が重なつた。

その反応を期待していたかのように、男は笑う。

エレメンツ。

その名は王国に生きる者なら誰でも知っている。

知らない者は生まれたての赤ん坊か、相当浮世離れした世捨て人くらいだ。

エレメンツとは王室直属の四人の魔法士のことであり、一人一人が一個師団相当の実力を持つとされ、王国最強の四戦士と謳われている。彼らはしばしば国民からヒーローのような存在として尊敬され、王国の象徴として多大な信頼を置かれている。

そんなエレメンツの息子と聞いて、驚かない方がおかしかった。

「そんなすごい奴がいたなんて……」

「確かに、入学式で緊張してる場合じゃないかも……」

二人は自分達がいかにすごい場所にいるのかを思い知った。そして、これからそんなすごい人たちと学校生活を共にすると考える、入学式の緊張などいつの間にか吹き飛んでいた。

「教えてくれてありが……あれ？」

ウィルがお礼を言おうと左隣りを見ると、赤髪の男は椅子ごと何処かへ消えていた。

それにカイネも気づき、不思議そうに辺りを見渡すが、姿はどこにも見当たらない。

「なんだつたんだあの人……」

「名前すら聞けなかつたよね。まさか幽霊とか、……。」

「お、おい！ 变な」と言つなよー。」

二人が話している数秒後に、入学式の始まりを知らせる鐘が鳴つた。会話はそこで強制的に終了され、一人はわだかまりを残したまま、入学式を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6799y/>

ろくでなしの救世主

2011年11月21日17時06分発行